

【論文要旨】 「内的な他者」からみた「葛藤のない」クライアント

野 口 寿 一

本研究では、昨今増加が指摘される、自分自身の心理的な問題を省みてそれについて葛藤する姿勢に乏しいクライアントを「葛藤のない」クライアントと呼び、彼らに対する心理療法のあり方を検討した。

第1章では「葛藤のない」あり方を検討するための本研究の観点と研究方法について論じた。これまで「葛藤のない」クライアントは解離や発達障害という概念から理解されることが多かった。解離性障害や発達障害に対する心理療法の研究を概観すると、内面を扱い心理的変容を狙うよりも具体的な教育や指示、支持的関係の提供および環境調整が重視されていることがわかった。それはほぼ精神病圏の者への対応と同様であるが、実際に心理療法の場では出会う「葛藤のない」クライアントには、上記の対応を適用することに疑問が残るような、重い病理や偏りをもたない者も多い。実情としては、「葛藤のない」クライアントは、従来のクライアントのように心理療法が展開しないというセラピスト側の違和感を通じて見いだされることが多いと考えられ、本研究では従来のクライアントのあり方からの偏差として「葛藤のなさ」を検討していくことにした。

セラピスト側の違和感が生じるポイントとして、他者についての語りクライアント自身の問題を見つめることにつながっていかないことに注目した。河合隼雄(1970, 1971)の事例を検討すると、従来のクライアントにおいては、意識的な自分の視点と、自分としては受け入れがたい無意識的な視点との内的な葛藤があり、他者に無意識的な視点を投影して心理療法の場で語ることで内的な葛藤に向き合っていくプロセスが起こっていることがわかった。他者の表象に重ねられて現れる内的な視点を本研究では「内的な他者」と呼ぶことにすると、従来のクライアントにおいては「クライアント(I)は、自身の内的な葛藤と深く関連する内的な視点を他者表象に重ね、その内的な他者について想像を深めて語ることを通じて『私』meを見直す」ことが起こっていたと考えられた。このことを踏まえて、他者について語っても心理的な変容が生じにくい「葛藤のない」クライアントを、《私》Iあるいは「私」meと内的な他者との関係性の特徴として捉えて検討していくことにした。

内的な他者との関係性を調べるための研究方法としては、TATを用い従来の

教示で物語を作らせた後に、その主人公以外の人物の視点から2つめの物語を作らせる変法（第2物語法）を用いることにした。この課題は、語り手が主人公に同一化して表現を行った後に、その主人公以外の別の人物に同一化して表現させる。そうして語られた第2物語には、他者の表象に重ねられて現れる内的な視点、すなわち内的な他者の様相が現れるのではないかと考えた。また、図版の人物について語り、それに対する他者の視点を語ることは、心理療法において《私》Iが「私」meについて語り、内的な他者について語るという構図と同様であるため、心理療法場面におけるクライアントのあり方を考えるための課題として適していると思われた。

第2章から第5章では、TAT第2物語法を用いた調査から「葛藤のない」あり方について検討した。調査対象は大学生を中心とする94名であり、図版1, 2, 3BM, 13MFを用いて、筆者が個別に実施した。まず、第2章では第2物語に「内的な他者」が投映されると言えるのかを検討するため、第2物語課題が課す心的作業の性質について考察した。第2の主人公の人物の視点からもう一つのお話を作るという課題が適切に行われていたかを調べたところ、ほとんどの反応において第2主人公の感情の生起や動機に言及されており、第2主人公の視点に立って語ることは一般にはさほど困難ではないことがわかった。一方でその課題に失敗したり困難さを訴えた者もわずかながらいた。その困難さの考察から、第2物語課題は、第1主人公との「関係の中の他者の視点」を想像する課題であり、語り手にとって自分自身の視点を棚上げして、他者性を帯びた他者の視点に立つ心的作業が要求されると考えられた。したがって、第2主人公の視点に表現された内容には、他者の表象に重ねられて現れる内的な視点、つまり本研究でいうところの内的な他者が投映されると考えられた。また、第2物語課題を適切に遂行できるかどうかをフィルターとすることで、他者の内面を適切に想像できない者を抽出できる可能性が考えられた。

次に、「葛藤のある」あり方では本人にとって異質なものとして内的な他者が現れることを踏まえ、第3章では、内的な他者に対する本人の意識的な捉え方に注目して「葛藤のない」あり方を検討した。まず、調査協力者の第2主人公に対する感想を分析したところ、日常的なあり方に近く自身のものとして意識的に受け入れやすいような側面から、自身と異なると感じられたり意識的に受

け入れ難かったりする側面まで表現されていることがわかった。ただ、「葛藤のない」特徴を示す指標として取り上げた解離傾向の高低は、内的な他者に対する意識の捉え方の内容とは有意な関連がなかった。解離的な傾向の高い者は、内的な他者を、外的な他者の表象と結びつける一方で、自分自身との結びつけて捉えにくいという特徴があることがわかった。それは「私」の像の希薄さにもつながるものであり、この結果は「葛藤のない」者において、他者についての語りが本人の変容につながりにくいことの背景を説明するものであると考えられた。

第4章では、内的な他者の「私」meに対する関係性から「葛藤のない」あり方について考察した。図版3BMの反応を取り上げ、第2主人公の視点の第1主人公に対する関係性を分析した。第2主人公の第1主人公に対する関わりの内容である「態度」と、第2主人公が第1主人公の悩みや困難に対して当事者の視点にあるか非当事者の視点にあるかという「立場」の指標を作成して不安尺度CASと解離体験尺度DESとの関連を数量的に検討したところ、第2主人公の第1主人公に対する「態度」のいくつかは不安の高低と関連していた。そして、第1主人公の悩みや困難における当事者(第1主人公にとっての相手)の視点に立つ者に比べて、非当事者の視点に立つもので解離傾向が高いという結果が得られた。この結果は、「葛藤のなさ」が内的な他者の「視点の内容」ではなく「視点の位置」と関連することを示唆していた。葛藤とは一般的には「私」を省みて悩むことによって生じるとされるが、「私」を見る内的な他者の「視点の位置」を考慮に入れる必要性が示唆された。

第5章では、「葛藤のない」者の悩み方とその深まりにくさの背景にある特徴について検討した。これまでの章で明らかになったことを踏まえ、(ア)「私」に対する相手の位置にある内的な他者について語るか(イ)「私」に対する非当事者の位置にある内的な他者を語るか(ウ)独立した視点をもったものとして他者を描けないかによって葛藤の様相が異なると考え、(ア)～(ウ)のそれぞれの特徴を強くもった調査事例を取り上げて検討した。

「相手」としての第2主人公の視点を語る者は、相手の視点を自ら想像して、相手の視点との関係をコンテクストとして悩むのが特徴であり、悩みの背後には相対立する2つの内的な視点の葛藤があると考えられた。その「相手」には、

自身が同一化している視点に対峙する内的な視点が投影されており、それゆえ、「相手」としての内的な他者について想像を深めて語ることは内的な葛藤に関わることになり、投影が解消されたり強まったりするという動きをもたらすことがわかった。それは、悩みを生み出している自らの主観性に関わっていくことであるため、自己物語を語る主体である《私》I の変化につながりうると考えられた。

それに対して、非当事者の位置にある第 2 主人公の視点を語る者の悩みは、行為の意味がはっきりしない罪悪感であったり、相手の視点を介さずただ自分が自分を見るような内省であったりと、相手との関係をコンテクストとしていないのが特徴であった。それが、対峙してくる相手の視点を自ら想像して図と地の緊張関係を作り出していた「葛藤のある」あり方との違いであった。さらにコンテクストのなさは、自分自身の行為の意味、ひいては自分の固有性に関する内的な感覚を希薄にする可能性が考えられた。また、非当事者の位置にある内的な他者について想像を深めて語ることで、悩みに外的に対処したり他人事のように流したりする心の動きが起こっていたが、それは「悩んでいる自分」を外から見て表面的に「私」に関わるようなものであり、元の悩みそのものに動きをもたらさないため、主観性によって悩みを生み出している《私》I の変化につながらないと考えられた。

そして、独立した視点をもつものとして第 2 主人公を想像できない者は、自分と世界との境界がないため、「私」の像もはっきりしないまま、ぼんやりとした不全感や自己愛に包まれたままになっていて、葛藤が生まれにくいと考えられた。さらに他者について語っても、それは直接自分について語ることに同一であったり、視点が切り替わらず同じ内容を反復するだけであったりして、新たな心の動きが生まれにくいと考えられた。また、彼らは他者と関わる際に、内的な他者を重ねて「私」がどのように見えるかという像を思い描いて関わっていないという点で、媒介なく直接的に他者の前にさらされており、悩みの内容や「私」の像を扱っていくアプローチが有効でない可能性が示唆された。

第 6 章から第 8 章では、これまでの章で明らかになったことを踏まえて、中立的に聴くという従来のセラピストのスタンスでは心理療法が展開しにくかったクライアントの心理療法事例を検討し、「葛藤のない」クライアントの心理療

法のあり方について検討した。

第6章では、自身の考え方に言及して「どうしたらいいのか」と述べるなど葛藤や内省力がありそうに見えつつも、表面的に同じ訴えを列挙するのみで心理療法が展開しにくかった事例を取り上げた。内的な他者という観点から理解すると、内的な他者の「視点の内容」には、本人にとって潜在的な攻撃性が投影されていたが、内的な他者と「相手」として対峙しそうになると、内的な他者との関係がほどけ、クライアントはぼやきや自己否定といった殻に自閉的に閉じこもっていた。葛藤や内省の訴えは非当事者の視点の位置から自分を眺めて生じているようなもので、クライアントには相手として内的な他者と対峙し続けられないという内的な他者との「関係性の構造」の不安定さがあると考えられた。心理療法ではTAT第2物語法を用いたセラピストの介入により、相手の視点と接触し対峙し続ける体験したことがきっかけとなって、クライアント自身の気持ちが噴出するように語られた。そこから、クライアントは他者に対して不満を表出するような象徴的な意味をもつ症状を出し、自身の内なる性質との関係が生まれ、外界に対して主体的に関わるようになるという変化が見られた。

第7章では、第3章で明らかになったような、内的な他者に対する自己関連づけのなさを特徴とする事例を取り上げた。クライアントは面接場面において自分自身について意識した内容を直ちに他者のことに置き換えて批判し続けた。それは、心的内容を容れる内面という器をもたず外界に散逸させるあり方であった。他者批判に窺える内的な他者の「視点の内容」には本人にとって異質な性質が投影されていたが、クライアントはまとまりのある「私」の像をもたないために、内的な他者は本人にとって全くの外側のことになっており、他者についていくら語っても変容が起こりにくいと考えられた。しかし、クライアントは、TAT図版の視覚的な人物像に収斂させるようにイメージを付与していくことで、まとまった形で苦しさを語り出すことができ、TATの人物は、内面という内側の器をもたないクライアントにとって外在的な器の役割を果たした。そうして、TATの人物に一旦自分を定位し外側の定点を作ったことで、それに対する他者の視点を語る事が可能になり、相手としての内的な他者との対時的な関係を表現する中でクライアントは自らの苦しさを溢れるように語った。

それをきっかけとして、クライアントは自身の気持ちを語れるようになり、外界と主体的に関わるようになっていった。

第 8 章では、第 6 章と第 7 章と違って、独立した他者の視点を内的に構成すること自体が難しく、TAT でも第 2 主人公の視点から語るができなかった事例を取り上げた。クライアントは、自他の境界がなく人間関係において拒絶されたと受け取って他罰的になりやすかった。面接においても他者の反応などから自身の振る舞いを省みる様子は見られなかったが、セラピストがクライアントの語った人間関係における「相手」の内面を伝えたり、セラピスト自身がクライアントの相手として対峙したりする関わりがきっかけとなって、他者から見た自分を認識しコントロールする意識が生まれたり、自分自身で居られる「内」の世界と、異質な他者がいる「外」の世界との分化が起こり、自分に適した形で世界と関わる手段を見つけられるようになっていった。

終章では、第 6 章から第 8 章の心理療法事例を総合的に考察し、「葛藤のない」クライアントの心理療法におけるセラピストの姿勢について論じた。内的な他者の「視点の内容」と「関係性の構造」とを区別することによって、「葛藤のなさ」の背景には、内的な他者との「関係性の構造」の不安定さがあると考えられた。そのような特徴をもつ者にとっては、相手の視点と対峙する「接点」の体験が、クライアントが自身の内面を感じ取る機会となる。それによって世界と主体的に関わるための内側の「芯」が生まれることが「葛藤のない」クライアントの心理療法のエッセンスであり、それは非当事者的な視点から表面的に「私」を眺めるような反省では得がたいものである。したがってセラピストには、内的な他者と対峙することを「強いる」と同時に「保護する」枠組みを提供した上で、表現されたイメージの流れに沿っていき内的な他者と対峙する瞬間を共にするようなコミットメントが求められると考えられた。